

## 歴史よもやま話 その12.

### 清少納言をこきおろす紫式部

世界的文学作品「源氏物語」の作者・紫式部は、和歌にも通じ百人一首に収録されているが、当時流行だった日記文学でも作品を残している。「紫式部日記」という。

藤原道長の招聘を受けて、一条天皇の中宮・彰子の局に、家庭教師兼女房として宮中に勤めており、この間の出来事を日記として記録している。

このなかで彼女は、「清少納言こそしたり顔にいみじうはべりける人さばかりさかしだち真名書き散らしてはべるほどもよく見ればまだいと足らぬこと多かり。そのあだなりぬる人の果ていかでかはよくはべらむ」

(清少納言は得意げに漢字を書き散らしているが、よく見ると間違いだらけ。こんな人の行く末に、いいことがあるだろうか) とボロクソにこきおろしてしいる。

清少納言は、その著書「枕草子」のなかで、中宮定子が白居易の漢詩「香炉峰」に係る謎かけに軽妙に応える場面を書いており、自らの漢文の素養を自慢している。また、小倉百人一首に収録された短歌「夜をこめて鳥の空音を謀るとも」は「史記・十八史略」にある孟賞勳の故事を詠んでおり、漢籍に通じていることをひけらかす歌とされる。

紫式部の育った家庭は、天皇に漢学を教授する家で、幼少の頃、弟が漢籍を教育される傍らに居て、彼女の方が先に覚えてしまうため、父親が「男だったら良かったのに」と嘆いていたという。

この時代、女性が漢字を使うことはいけないことであり、自らの漢学の素養を隠していたのに、清少納言は無邪気なおおっぴらに自らの漢学の素養をひけらかしている、羨ましいやら憎たらしいと思ったのかもしれない。

実は紫式部は「紫式部日記」のなかで、さりげなく自分の漢学の素養を自慢している記述がある。「左衛門の内侍といふ人侍り、(中略)うちのうへの源氏の物語、人に読ませ給ひつつ聞し召しけるに「この人は日本紀をこそ読み給ふべけれ、誠に才あるべし」との給はせけるを、ふと押し量りに、いみじうなん才あると、殿上人などに云い散らして、日本紀の御局とぞついたりける。このふるさとの女の前にてだに、つつみ侍るものを、さる所にて才さかしいで侍らんよ。」

(左衛門の内侍という人がいます。(中略)内裏の主上様が源氏物語を人に読ませ、お聞きになっているときに「この人は、きっと日本紀を読んでいるに違いない。本当に学識があるようだ」と仰せになったのを、ふと当て推量に「たいそう学識を鼻にかけている」と殿上人などに言いふらして、「日本紀の御局」と渾名をつけた。実家の侍女たちの前でさえ包み隠していたのに、どうして宮中で才をひけらかすようなことするのでしょうか)

上述は、世界的名作「源氏物語」の作者・紫式部というイメージとの落差が大きいのであるが、彼女の微笑ましい人間味が感じられて、これを読む者をほっとさせる。